



第16号(2020年冬号)  
発行日 2020年3月13日

信州大学教職支援センター

Shinshu University  
Center for the Teaching Profession

# 教職支援センター ニュースレター

## 巻頭言

### 【寄り添う姿勢—子どもの思考と表現の視点から—】

私は、年に20回ほど特別支援学校を訪問しています。参観したあと、コメントを求められることがたびたびありますが、そのときに大事にしている視点があります。それは、子どもの「思い」を受け止め、寄り添うという教師の姿勢です。

私たちは、日々いろいろな体験をしながら様々な「思い」を浮かべています。この「思い」は、次から次へと流れるように通り過ぎていくもので、視覚的で映像的なものです。この視覚的で映像的な「思い」は、子どもでも大人でも、また障害があるなしにかかわらず、誰にでもあるものです。例えば、確かめようがないかもしれませんが、生まれたばかりの赤ちゃんにもあるはずで、その「思い」はその人だけのものであって、ほかの誰のものでもありません。そのように考えると、一人一人の「思い」は、実に神秘的で、かけがえのないものと言えます。

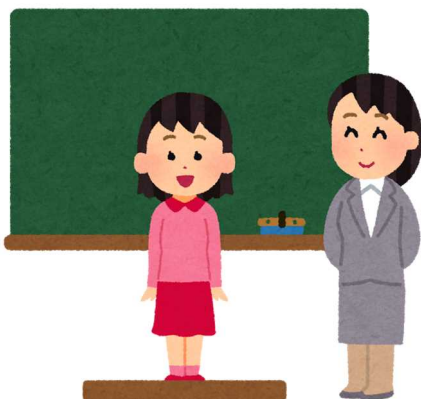
頭の中を流れるように通り過ぎていく「思い」の一部は、言葉という形に置き換えられていきます。そのことによって思考が展開していきます。つまり、視覚的で映像的な「思い」は、思考の出発点だと言えます。100年近く前ですが、ソビエトの心理学者ヴィゴツキーは、思考の発達から「外言」から「内言」への移行という形で進むとしました。例えば、2~3歳の段階では、言語化された思考は、口から外に向かって発せられる「外言」という形で表れます。しかし、発達が進むにつれて、思考は、コミュニケーションとは異なる言語機能として分化していきます。考えたことのほとんどは口から出てこない「内言」という形になり、自分自身の中で消化されていくようになるわけです。

一方「内言」は、自分自身への言葉なので、独善的で、一般的ではないという側面もあります。内に向けられて完結していくため、文法の正確性、因果関係の明確性や妥当性といったことは評価されないのです。頭の中でどんなことを考えていても周りの人は分からないわけです。

そこで、学習においては、考えたことを社会化していく過程、つまり、一人一人の思考を更に複雑な論理的思考として深く発展させるために外に向かって表出させ、それをフィードバックさせるという活動が必要になるわけです。授業の中で、考えたことを発表させる、あるいは学習シートを用意してそれに記入させるというのは、まさにこういう意味合いがあります。

もしも、テストでよい点を取らせるために正解を覚えさせるというようなドリル的な課題が学習の中心になっていくとしたら子どもの学習は歪になります。○か×ではなく、そのときの「思い」がきちんと表現されているかが学習の中心でなければなりません。そのために、頭の中にある「思い」という映像を言葉という形で表出させることが必要になるのです。授業の中でタブレットやPC等の活用が求められる時代になりますが、こうした観点での活用が進められる必要があるでしょう。

さて、外に向けて発信することは、とてもしんどく、勇気が必要なことです。また、視覚的なものを正確に言葉で表すためには高い言語力が必要です。だからこそ、教師には、一人一人のかけがえのない「思い」を受け止め、それに寄り添うという姿勢が求められるのです。



庄司和史(教職支援センター教授)

# シリーズ 活躍する卒業生

教職支援センターの前身の教職教育部が発足して10年が経ち、多くの卒業生が教育現場で活躍しています。毎回テーマを決めて、卒業生の活躍を紹介します。

## ～ vol.11 理数系編 ～



筑波大学附属聴覚特別支援学校 高等部 教諭

## 相澤 龍大 先生

理学部数学科 平成25年度卒業



2014年3月に信州大学を卒業してから上越教育大学大学院に進学し、その後、縁あって筑波大学附属聴覚特別支援学校への採用が決まり、今年で4年目になります。勤めはじめて現在まで、高等部で数学の授業を担当しています。

私の勤める学校はいわゆる聾学校で、生徒は耳の聞こえない生徒です。したがって、授業では手話や指文字、口形や視覚情報を駆使して伝えることになります。「見てわかりやすく」を意識した授業は聞こえない生徒だけでなく、聞こえる生徒にとっても大事なものであると感じます。また、同じ授業を担当していても、クラスや年度が違っていると違った手立てが必要になります。幸い1クラス4人～10人程度の少人数授業なので、生徒の興味・関心、既習の知識、どこで躓いているのかを丁寧に把握する時間を作ることができます。

忙しい毎日ではありますが、やりがいを感じるのは、やはり生徒と関わっているときです。初年度から女子バレーボール部の顧問を担当し、バレーボールの経験はありませんでしたが、2年目からは監督を任せられました。そして今年度の関東聾学校大会では生徒の努力の甲斐あって優勝することができ、生徒とともに喜びを分かち合うことができました。

昨年度からは担任として生徒と関わることになり、今2年目です。成績だけではなく、文化祭や体育祭などの行事や、委員会活動など、様々な場面で生徒の成長を感じることができ、自分のことのように嬉しく感じます。

大学のときは遊び呆けていたので、今苦勞することが多いです。特に大学で勉強するような専門知識は、自力で勉強しようと思うと大変です。時間も中々とることができませんし、周囲も同じ学問を志す仲間というわけではありませんので、わからないところがあってもすぐに誰かに聞くことはできません。皆さんには、恵まれた環境である今のうちに一生使える知識を身につけてほしいと思います。

一方で、学業以外の活動も大事であると感じています。私自身、大学生活で得られた計画力や行動力、また、物事を先まで予測する力は、教員になった今でも活かされている力だと感じます。

教員という仕事は総合力が問われる職業です。大学生活では一つのことや考え方に凝り固まるのではなく、様々な経験をしてください。その全てが教員になったときあなたの役に立つと思います。



埼玉県 三芳町立三芳東中学校理科 教諭

## 唐澤 ゆき乃 先生

農学部食料生産科学科 平成28年度卒業



教員になってから早いもので、4年目を終えようとしています。現在、2年目から担任として持ち上がりで見えてきた3年生たちが、進路実現という初めての壁に直面しています。自分が初めての受験を迎える時、どんな気持ちだったのか。どんな言葉

葉が欲しかったのか。日々、考えながら生徒たちと接しています。

漠然と教師への憧れはありましたが、農学部食料生産科学科に入学した当初は、教員免許が取れることすら知りませんでした。自然が好き！食べることが好き！できれば農業に関わりたい！それだけで学校を決めたものですから、今では教職課程があって本当に良かったと思っています。

この仕事は、学生時代予想していた以上に沢山の業務に追われます。「これから先生になろう」という方が読まれているのに、いいのかしら…という思いもありますが事実です。授業準備に加え、学活・総合の準備、校務分掌の業務、委員会の運営、部活動の指導…等々。こんなにあるのか、と最初の年はかなり右往左往し、時には涙を流したことも数知れず。

だからこそ大切だと実感したのが、職場内でのコミュニケーションです。決して一人で抱え込んではいけません。特に最初のうちは自分で解決してやろうなんて思わないことです。わからないことはわからない。助けてほしい、と周りの先輩方に伝えられる事が重要だと思います。特に生徒については、教員間で共有することが重要だと学びました。生徒全員と上手に付き合えるわけではありません。対人間のことで、やはり相性があります。担任だけではなく、養護教諭や相談員、支援員の方々にも協力を仰いで話を聞いてもらう等、みんなで支えていこうという体制の必要性を感じています。

「みんな違ってみんないい」と言いますが、これは教師にも当てはまるとしています。最初は自分の無力さや、この職業に向いていないと毎日痛感していました。ですが先輩の「みんながみんな完璧な人ばかりではない。それでは生徒も息が詰まってしまう。あなたみたいな先生も必要」という言葉に救われました。生徒指導などは職員全員が同じ方向を向いていなければならないことですが、我々にも個性があっていい。生徒たちには毎日のように言っているのに、大人がそれを忘れそうになります。日々生徒と共に学んで成長を続け、理想を忘れずに私らしく歩み続けたいと思っています。

色々と書きましたが、この仕事楽しいです！辛いことがあっても生徒たちの笑顔や、放課後に先生方と生徒のエピソードで和んでいると、この職を選んでよかったと思えます。この春、先生となる方はもちろんのこと、みなさんに良い出会いがありますように。



## 教職支援センター11～2月の動き

- 教員免許状更新講習に関する長野県教育委員会と県内関係者打ち合わせ会(11/1)、
- 松本附属学校園と松本キャンパス教職課程設置学部との打合せ(11/11)、
- 教員免許更新支援センター運営委員会(11/11、2/10)、○教職支援センター拡大打合せ(12/17)、
- 教職教育委員会学芸員養成課程実施部会(11/19)、○教職支援センター運営委員会(11/19)、
- 農学部と近隣教育委員会・協力校等と教育実習等にかかわる懇談会(12/10)、
- 教員免許更新支援センター会議(1/24)、○長野市教育委員会との連携協議会(1/27)、
- 教職セミナー(2/4)、○長野県総合教育センターとの人文学部指導法反省会(2/17)、
- CST附属松本中学校参観実習(2/19-2/21)、
- 長野県総合教育センターとの連絡協議会(2/21)、○初級CST認定審査(2/27)





# 報告：地域連携事業について



- 教職支援センターを通じた地域連携事業について、令和元年度の実績をご報告します。  
(人数は、各支援事業を行った学生数。※含他の事業との兼務)



令和元年度 年間実績:290名

## 1) 就学前教育

- ・保育補助員(池田町認定こども園):6名

## 2) 義務教育関係

- ・居場所支援(安原地区公民館):22名
- ・授業支援(松本市立旭町小学校):6名
- ・特別支援学級支援(松本市立岡田小学校):2名
- ・センター指導員(あがた児童センター):3名
- ・特別支援学級支援(アルプス公園引率):2名
- ・学習支援(信州大学附属病院院内学級):5名
- ・学習支援(松本市立清水中学校):20名
- ・学習支援(長野市立犀陵中学校):3名
- ・学習支援(伊那市立伊那小学校・伊那市立伊那中学校・伊那中央病院):1名
- ・児童クラブ支援員(南箕輪村放課後児童クラブ):5名
- ・学習支援(南箕輪村立南箕輪中学校):3名
- ・プール支援(上田市立清明小学校):3名
- ・学習支援(上田市立第一中学校):6名
- ・学習支援(生坂村 生坂地域未来塾):13名
- ・学習支援(高森町):1名
- ・学習支援(反貧困セーフティネット・アルプス 無料こどもじゅく):12名
- ・学習支援・子ども食堂(ココササ食堂):6名
- ・居場所支援(子ども支援・相談スペース はぐルッポ):6名
- ・居場所支援(EXPO-Jルーム):2名
- ・国際交流(ヤング日本語教室):2名
- ・学び支援(チャレンジしのめ塾のサポート):11名
- ・イングリッシュキャンプ・学習支援(朝日村):13名

## 3) 高等学校関係

- ・授業支援(エクセラン高等学校):7名
- ・学習支援(東京都市大塩尻高等学校):11名
- ・語学支援(東京都市大塩尻高等学校):4名
- ・探究支援(松本県ヶ丘高等学校):28名
- ・探求支援(松本美須ヶ丘高等学校):21名
- ・探求支援(長野県立軽井沢高等学校):3名
- ・授業支援・キャリア教育支援  
(長野県立白馬高等学校):14名
- ・「令和元年度生徒の主体性を育む夏合宿」:18名

## 4) その他

- ・主権者教育(選挙に関わる若者立会人  
・選挙啓発・キャンパス啓発):5名
- ・第5期まつもと子ども未来委員会スタッフ:4名
- ・まつもともっとよくしよプロジェクト  
(松本市役所):19名

たくさんの学生が  
地域で頑張っ  
ています!



(教職支援センター准教授 荒井英治郎 田村徳至)

## 編集後記

新型肺炎の拡大を受け、不安や混乱が広がっています。そのようななか、今号も、教員として活躍する卒業生の前向きな声をお届けすることができました。日々の生活習慣に気を付け、一刻も早く事態が落ち着くことを祈りつつも、読んでくださる皆様には、こうした明るい文章にほっと一息つく時間も取っていただければと願います。(広報担当 河野桃子)

